

体育科の授業における コミュニケーションや意欲を生み出す学習支援

— ユニバーサルデザインを活用して —

学籍番号 239346

氏名 矢野さくら

主指導教員 鉄口宗弘

副指導教員 井上功一

1. 背景・目的

1. 1 背景

学校現場では、インクルーシブ教育が推進されつつあるが、UNESCO と文部科学省では、推進するインクルーシブ教育にはズレがあり、UNESCO は「すべての子ども」を対象としているのに対し、文部科学省は「障がいのある子ども」に焦点をあてている。UNESCO が提唱するように「すべての子ども」、つまり障がい、国籍、文化、ジェンダー等すべての人を包括できてこそインクルーシブ教育ということができ、共生社会たるものが実現されるといえよう。中でも本研究に関する国籍について、日本では外国人児童生徒が増加し続けている。彼らは、言語や文化の違いにより学業不振や人間関係等の課題を抱えている。また協働的な学びが推進される中で同様の課題から、さらに学習に遅れをとることが考えられる。これらの課題について背景は異なるものの日本人生徒も同様のことがいえる。

加えて、運動やスポーツをすることが「ややきらい」、「きらい」と回答した女子生徒が 2 割を超えており、体育に対する意欲の低い子どもが一定程度いることが示されている。

そこで、体育科の意欲の向上、協働学習の促進を行っていくためにも、ユニバーサルデザインを活用した授業づくりが必要であると考え。ユニバーサルデザインとは、すべての子どもが「わかる」、「できる」と感じられるような指導を教師が行うことである。

1. 2 生徒の実態把握

積極的に体育の授業を受けている生徒が多いが、ペア学習やグループ学習の際に、スムーズに活動できない様子が一部で見られる。体育科の授業では、授業プリントを活用する場面は少なく、ICT は活用していない。外国人生徒は、3. 4 組に各クラス 1 人在籍しており、ペア学習やグループ学習を行った際、積極的に話し合っていない。また、生徒の表情は授業中、硬い。

2. 研究方法

2. 1 対象

大阪市 A 中学校 1 年生女子 68 名を対象として、ハードル走を行う。

2. 2 対象

授業のユニバーサルデザインの 3 視点である「焦点化」、「視覚化」、「共有化」を基に教材や教具を作成し授業を行う。具体的な実践の手立ては以下に示す(表 1 抜粋)。コミュニケーションの生み出しや協働的な学びの促進における手立てについては、役割の設定や動きのポイントを書いたカードの配布、授業プリントの工夫等を行なった。

検証は、体育に関する意識調査、協働的な学びに関する意識調査、外国人生徒にのみ日本語を母語としない生徒に対する学校生活、授業等に関する調査を行い、単元前後の平均値の比較を行った。

表 1 授業のユニバーサルデザインの 3 視点の手立て (抜粋)

	支援の手立て
焦点化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の流れのルーティーン化 ・ 授業のねらいを明確化
視覚化	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT で地震の動きを視覚化 ・ イラストや写真を用いての説明
共有化	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ学習での教え合い活動

3. 結果および考察

体育に関する意識調査は、多くの項目において単元前から単元後で平均値に高い値がみられた。協働的な学びに関する意識調査では、人に意見を伝えられるようになったという回答が増加した。また、外国人生徒においては、実施した授業で以前より日本人生徒と話す機会が増えたと回答した。

このことからユニバーサルデザインを活用した授業は、体育の意欲を向上させることやコミュニケーション、協働的な学びの促進に効果があったと示唆できる。

4. まとめ

本研究では、体育科におけるユニバーサルデザインを活用した授業が、体育に対する意欲、コミュニケーションの生み出しによる協働的な学びを促すことに効果があったといえる。大切なことは、誰に対する支援ではなく、「何に」困っているのかを知り、そこに支援の手立てを講じることであり、それが学習者に対し効果的なものになる。一方で、授業のユニバーサルデザインによる介入のし過ぎにが、子どもの思考・発見する機会を失わせてしまうことが考えられる。主体的・対話的で深い学びが求められる中でどこまでを支援し、どこまでを子どもたちに委ねるのかをしっかりと考える必要がある。